

五四新文化運動と中国思想界

編集部

一
五四運動には広狭二つの定義がある。

狭義の五四運動とは一九一九年五月四日に北京大学を始めとする学生がパリ和会議の山東決議案に抗議して街頭デモを行い、国民大会の招集を求めて、「外は主権を争い、内は国賊を除こう」(『五四北京学界全体宣言』)とした運動を指す。以後、デモ、工場・市民ストライキは上海、天津、南京、杭州、武漢、九江、濟南、蕪湖等の地域に拡大、全国レベルの学生と市民参加による反帝愛国運動が形成された。当時の北京大学学生で、運動の組織者の一人でもあった羅家倫はこの反帝愛国の学生運動を「五四運動」と称した。広義の五四運動は今述べた反帝愛国学生運動の思想文化のバックボーンをなし、愛国学生運動によって一層高揚し

た新文化運動である。その時期は一九一五年に陳独秀が上海で創刊した『青年雜誌』(第二巻は『新青年』と改められ、一九一六年からは北京で出版された)に遡り、二〇年代初期まで続いた。この新文化運動は科学と民主の二つの旗幟を高々と掲げ、旧道徳に反対、新道徳を提唱し、旧文学に反対、新文学を提唱して、思想文化の領域で破天荒の大潮流を作り出し、二〇年代以降の二〇世紀中国に甚大な影響を及ぼしたのである。

二

今述べた運動の二つの側面には当然、特定の内容と範囲があるが、それらは表裏一体で相互に影響を及ぼし合い、深い内的関連を有していた。五四反帝愛国学生運動の構成員である北京大学学生は当時から両者の関連を自覚してお

り、彼らの創刊になる『新潮』が「五四」の半年後に発表した評論には、今推進する事業を「文化運動」とはつきり宣言している。さらに国民革命の指導者、孫中山も五四愛国運動が強大な思想文化運動を誘発することを鋭敏に洞察していた。彼は一九二〇年初めに「海外同志に与える書」でこう指摘した。

北京大学の学生が五四運動を発動して以来、思想の革新によつて将来の事業の革新に備えて、積極的に発言しないような愛国学生はなく、国内の各界の世論もそれに唱和している。各出版物も熱心な青年によつて運営され、続々と流布され、議論も百花繚乱、思いの丈を述べ、社会は絶大な影響を被っている。頑迷な偽政府でさえ、その取り締まりには躊躇している有様だ。この新文化運動は我が国今日の思想界における空前の大変動である。

「新文化運動」という現在の呼称は、孫中山をもつて嚆矢とする。彼は同じ文章の中で、「我が国民党が革命を成功させようとすれば、思想の変化に依拠しなければならず、兵法に心を攻めるといい、心を革めるといふのも、それがためだ。この新文化運動が得がたい価値ある所以である」とも言い、新文化運動の歴史的功績に高い評価を与えた。以後の歴史の進展は五四新文化運動が実に現代中国思想界の大変革の始まりであったことを証明した。

三

五四運動の精神的指導者である陳独秀、胡適、李大釗、魯迅らは、二〇世紀初頭に台頭した欧米思想の洗礼を受けた新しい知識界のエリートで、同時に伝統的学問の深い素養を有し、「反伝統」を標榜しながら、中国士大夫の「天下国家を己の任務とする」伝統を継承していた。魯迅が青年時代に「我は我が血をもつて軒轅を継ぐ」という誓いをなし、李大釗が「鉄肩にて道義を担い、妙手にて文章を著す」という警句をものしたのは、この点を如実に物語るものだ。民族の危機を救済し社会の近代的転換を実現するという二重の使命に直面し、かつ戊戌変法、辛亥革命の相次ぐ挫折という教訓の総括の上に、彼らは「思想文化を借りて問題を解決する方法」を唱え、中国文化の革新を通じて中国社会の革新を達成するという目標を掲げて、ごく限られた時間で、「ころがる石のような」急進的な新文化運動を発動した。そこには、「三綱」を批判して民主を勝ち取り、旧礼教を非難して個性解放を提唱し、迷信を除去して科学を宣揚する新思想運動と、文語文を口語文に取って代える新文学運動の二つの内容が含まれる。

「五四」前後の数年間、新文化運動の陣営の目標は概ね一致していたが、政治情勢の急激な変化や欧米の様々な思潮

(自由主義、人道主義、無政府主義から社会主義にいたるまで)の浸透と衝撃に加え、中国固有の文化資源(儒家、仏家、道家、法家、墨家等の異端思想と民間文化)の錯綜した複雑な影響によって、新文化運動は急速に分裂、分離発展する状況を呈し、概略すればラディカリズム、保守主義、リベラリズム(自由主義)の三つの方向が生まれた。勿論、中国思想界のこうした「三極」構造は決して三者がバランス良く対峙するものではなく、事実、三者の勢力の消長は時期により大きく異なつた。

現代中国が直面する民族危機が極めて緊迫しており知識人に「座して道を論じる」余裕がなかつたのと、旧陣営の地盤が磐石で勢力が強大だったため比較的温和で漸進的な改革方式が一再ならず失敗し、国民の挫折感と圧迫感が急進的な情緒を生んで外来の(フランス式やロシア式)の急進思想と結び付いた結果、ラディカリズムは急速に支配的な地位を占めた。こうしたラディカリズムには旧文明が生み出した歴史の惰性を一掃する働きがあり、革命的な飛躍が必要な段階では時代の推進者の役割を期待できた。だが、この思潮は「ころがる石のように」ますます急進化していった。中国ラディカリズムの創始者である陳独秀が後に「右傾」と指弾され急進主義の滔滔たる奔流から放擲されたのは、急進化せねばやまない現代中国のラディカリズムの一表現なのだ。民主革命時代に中国共産党内の左傾冒

険主義の一貫した非難と排除を被つてきた毛沢東が、政權掌握後直ちに左傾ラディカリズムの泥沼に陥り、「反右派」「反右傾」闘争と「文化大革命」を続けて発動したのは、現代中国ラディカリズムの強大な慣性をもつと雄弁に物語る。指摘すべきなのは、ラディカリズムはそれぞれの時期によってその内容と社会的機能に大きな差があり、例えば五四時期のラディカリズムと「文革」の思想を一律に論ずることはできないにしても、社会と文化の現状を急激に、かつ暴力的に改革しようとする思惟モデルはほとんど同一で前後一貫していることだ。

強大なラディカリズムに覆われた中国思想界にあつて、文化保守主義はこれまで時宜に適さないものとして、ずっと思想界の傍流に置かれてきた。だが、文化の時代的な転換を主張するとともに民族性の継承という課題からも離脱しない文化保守主義は、熊十力、馬一浮、梁漱溟たちが儒学、仏学、西学の比較と綜合に沈潜、尽力し、思想の潜在力を蓄積するという地道な活動を経て、当時は注目されなかつたものの、その海外の子弟である唐君毅、牟宗三らによる二〇世紀後半の研鑽と、八〇年代以後の杜維明らの喧伝によって、中国大陸でもかなりの反響を引き起こしたのである。

リベラリズムについては、その担い手の中産階級やヨーロッパ化された知識人の勢力が中国では微弱なため、「和す

る者は少ない」し、四〇年代末以来、中国大陸では長期にわたり同学派が断絶していたのだが、民主と自由の理念を喚起する主義として、それは地下水の流れのように思想界を感化し続け、今や更なる発展の途上にある。

四

二〇世紀の七〇年代末期に改革開放路線が確立してからの二〇年間、中国社会には空前たる現代化への転換が起こり、思想界にも根本的な変化が現れた。既述の三つの思潮について言うなら、それらはこの二〇年間に調整、再編、変動の只中にある。

かつて巨大な喚起力を有したラディカリズムは、約半世紀の曲折の中で極限に達した後、人々の広く放擲するところとなり、この二十年來、「急速な失墜」状況にある。経済と社会領域の左傾路線が清算修正されてから、中国思想界は二〇世紀のラディカリズムへの反省を開始したのだ。ラディカリズムの生まれた歴史的必然性をどう認識するか、それぞれの時期におけるラディカリズムの思想内容、表現形式、社会的機能等をどう評価するかについて、現在の中国思想界にはなお異なる意見がある。海外で出版された李沢厚、劉再復の『革命よさらば』は、ラディカリズムに対して全面的否定の態度を採ったが、それに反駁する論者も

多く、「ラディカリズム」と「革命」に対する歴史主義的な具体的分析の必要性を主張している。

ラディカリズムへの反省に伴い、ここ二十年來、現代新儒家を代表とする文化保守主義の紹介と研究が、思想界では静かなブームを呼んだ。胡適や五四時代のリベラリズムの再評価も論壇には散見する。意見には隔たりがあるが、文化保守主義とリベラリズムをラディカリズムと並ぶ五四新思潮の重要な支流と見ることは論壇の共通認識となった。

現在の中国思想界で最も顕著なのは勿論、主流の位置を占めるマルクス主義の新展開である。マルクス主義は五四新文化運動によって新たに中国に導入された思想体系として、八〇年にわたって波瀾に富む発展の過程を遂げた。この十年來、旧ソ連、東ヨーロッパの激変、ポスト冷戦という国際情勢に直面して、さらには中国の改革開放における社会实践の深化に対応して、現代中国のマルクス主義は更なる中国化（中国の文化伝統との結合、中国の現実の国情との結合）と更なる現代文明との適応化（陳腐な教条主義からの不断の離脱）という二大特徴を呈しており、その発展状況は中国社会と中国思想界の進路に対して重大な影響を与えるだろう。

一九九九年六月三〇日 愛知大学にて

（馮天瑜著、緒形康記）